



書評

[評者]

青木 眞

感染症コンサルタント

CDCのフィールド疫学マニュアル

The CDC Field Epidemiology Manual

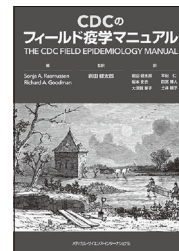
監訳・訳：岩田健太郎

訳：坂本史衣・大須賀華子・本田 仁・
四宮博人・土井朝子

●B5変 頁312 2020年12月

定価：4,620円(本体4,200円+税10%)

[ISBN978-4-8157-3008-6] MEDSI 刊



<天気「後」報から天気予報の国へ>

昨今の天気予報は非常に良く当たる。筆者が子供の頃の「晴れたり曇ったりところに雨」とは隔世の感がある(筆者の記憶違いであつたらごめんなさい)。明日の天気に関する情報は洗濯、買い物、その他、庶民のさまざまな生活に有用である。実際、「洗濯日和」など、「何をしたらよいのか」までガイドしてくれる昨今の天気予報である。逆に昨日は雨でしたが、一昨日は快晴で洗濯日和でした…といった過去の情報は庶民にはあまり意味がない。だいたい過去の情報をどのように今日用いたらよいのか庶民にはわからないのだから。

あの「3.11」から10年を迎えたが、日々報道される「昨日」のコロナ感染者が何名、累計死者数が何名という数字が不思議な既視感を与える。10年前も、昨日は何ベクレル、何シーベルトであるという数字が毎日テレビなどに流されつつ、それでいて筆者を含め庶民は「だから今日どうしたらよいのか」わからなかった。野菜を避けるべきか、西に非難すべきか…わからなかった。ちょうど今回、GoToすべきかどうかわからなかったように、感染者数でも放射能でも何の目的ももたずに漠然と数字を羅列し続ける病理は何に起因するのか?

明日の天気について語るには、それを科学する組織が必要だし、それをを用いるという意志が必要である。今後も続くかもしれないパンデミックに備え、「今日何をしたらよいのか」を科学する組織が必要である。そのような組織は既に日本を除く多くの先進各国にあり、米国の組織が使用しているマニュアルが本書、『CDCのフィールド疫学マニュアル(The CDC Field Epidemiology Manual)』である。既に半世紀以上使用されて本書は第4版。

<本書の一部を紹介>

極めてテクニカルな内容のマニュアルなので詳細は本書を参照願いたいが一部を紹介すると……。

第1章 フィールド疫学を定義する：

p.3 フィールド調査はしばしば、疾患の原因やソースについて、これといった仮説なしで始められる(国立感染症研究所の実地疫学プログラムの創設に寄与したJohn 小林医師の表現を借りると、「実地疫学は飛んでいる飛行機の中で、その飛行機の設計図を書くようなもの」…言い得て妙：筆者)。

p.4 公衆衛生上の緊急事態は…中略…長く認識されておらず起きるのを待っていた状態のままだった問題である(そのとおり…：筆者)。

p.5 世論と政治について：世論、政治のリーダー、さらにメディアから首を突っ込まれることがあり、これはフィールド調査のすべてのステージで起こり得る(素人である知事や首長に記者会見用レクをする時間を取られ、本来の仕事ができない専門家や哀れ、リスクコミュニケーションの専門家、首長と専門家の住み分けが重要：筆者)。

第9章 疫学と検査の協力体制を最適化する：

p.121 疫学は科学的な分野の複合体に基づいていなければならない。…中略…公衆衛生検査室には、微生物学、寄生虫学、統計学…中略…さまざまな技術分野の専門家がいる(地衛研で公衆衛生・疫学分野が異端視されるような文化は論外：筆者)。

第14章 複数の州と連邦政府機関の連携

p.169 アウトブレイク対応を成功させるためには、効率的かつ効果的な複数管轄区間の調整のための計画を作成し実行する必要がある。

第16章 緊急対策センター(emergency

operation center : EOC) とインシデント管理システム (incident management system : IMS)

p.183 米国における EOC や IMS などの国家的な緊急事態管理プログラムは…中略…管轄区域を横断して緊急事態管理の構成要素と原則を標準化する…(非常時の横串機能が不思議と苦手な日本. これはもはや文化・遺伝子なのか:筆者).

<後書き>

本書ほどテクニカルな内容ではないが、既に国立感染症研究所の実地疫学プログラムの指導医と研修修了生による類書が2015年に医学書院から出ており[『感染症疫学ハンドブック』谷口清州(監修), 吉田真紀子/

堀 成美(編)], それに対する筆者の書評は6年後の今日もまったく変える必要がない. 以下は6年前の書評の一部.

「MERS 以前からエボラ, デング, 鳥インフルエンザ, HIV…新しい微生物が出るたびに日本の関係機関(行政, マスコミ, 医療機関)が示す「右往左往」は“金太郎飴”のようにまったく同様であり, 既得権益を享受する人々の焼け太りを含めて今後も変化の兆しがない.」「この絶望的な状況に僅かではあるが新しい光を投げかける本書が多くの読者を得ること, 特に日本の保健行政の要路を決める方の目にとまることを切望します」

本マニュアルも多くの関係者の目にとまることを切望します.